

やまびこの郷の皆様へ

こんにちは。風も冷たくなり、山の木々も少しずつ紅葉をし始めました。やまびこの郷では、あの大きなお風呂でほっと一息つきたくなる季節でしょうか。

先日そちらからアンケート調査が届き、やまびこの郷に通っていた日々をととても懐かしく思い出しました。

私が初めてやまびこの郷を訪れたのは、中学1年生の2月だったと思います。いわゆる「中1ギャップ」に陥り、不安で学校に通う中、いじめの標的となってしまいました。その後、耐えきれなくなり不登校になりました。

いじめられた事実や不登校になったことを受け入れられず混乱していた時期に、やまびこの郷と出会えたことは、私にとってとても幸いなことでした。内申書を気にしていた母も、登校日数がもらえるとあって、快く送り出してくれました。

私は多くの友達と出会うきっかけをもらいました。彼らと過ごした時間は、学校というものに縛られていた私の心を解き放し、ありのままの姿を受け入れてくれました。自分は落ちこぼれで特別な存在であると思っていましたが、彼らの存在を知ること、苦しいのは自分だけではなかったのだと感じました。私の居場所となり、傷ついた気持ちを支えてくれた彼らの影響力は計り知れません。「学校には行けなくてもいい。私達は何も悪くない」と励まし合う日々でした。

普通の子とは違っても、親や教師が認めてくれなくても、あなたはあなたなのだと肯定されることが、私にとってどれほど支えだったか。今思えば、命を繋ぎ留める唯一の希望だった気がします。彼らに出会えたこと、そして寄り添ってくれたことに感謝しています。彼らと会うために、やまびこの郷だけでなく、遠く離れた街に出かけたり、何週間も泊まり込み家から離れたりしたことは、その後の人生を踏み出す自信に繋がっていたように思います。長期滞在を受け入れてくれた友達の両親にも感謝です。親の登校刺激から逃れ、プチ家出とも言えるあの日々は、のびのびとしており、夢の中でもいるようにとても楽しかったのを覚えています。

家にいる現実の世界は恐ろしく凍り付いた世界で、私は孤独に怯えていました。学校に行きたくても行けないという状態は、焦り、不安、無力感、板ばさみの状態であり、逃れることのできない苦しみでした。私は中学3年間、この苦しみを抱えながら過ごしました。さらに追い打ちをかけたのは、特に母親からの叱咤・激励はとてきつくと、自尊心の崩壊を招きました。「どんな私でも受け入れて、認めてほしい。愛情がほしい」という私の淡い期待は、それらによって幾度も踏みつぶされ、人間不信に陥り、自己防衛からの暴言・暴力・自傷行為などを生みました。

今ふり返れば、母にとっても初めての挫折で、彼女自身も当時を必死に生きていたんだと思います。しかし、余裕のなかった私は、母の思いに応えることのできない自分に失望するだけでした。そのことは、存在価値の喪失であり、生きる意味の喪失でもありました。本当に当時の私の心情はきびしいものだったと思います。

「やまびこの郷では元気なのに、なぜ学校に行けないの？」と、よくスタッフさんに問われましたが、私は説明力が乏しかったのでうまく言葉にできず、悔しい思いを何度

もしました。また「ちかちゃんなら大丈夫。学校にだって行けるよ」という温かい励ましも、歪んでいた当時の私には、「結局、不登校である私は肯定してもらえない」というとらえ方しかできず、強い悲しみと裏切りを覚え、スタッフさんに刃を向け、反発したことを覚えています。不登校者を受け入れながらも、県立の教育機関であるためか、最終目標として学校復帰を掲げることは、とても矛盾していると私は思います。「学校が一番生徒の成長に適した場所である」という考え方は、私もそうであったように、多くの不登校者を苦しめるだけではないでしょうか。

大学入試でも、AO入試が増える中、学力のあるなしにこだわる必要があるとは私には思えません。大学で入ったゼミの半数が不登校経験者であったことに、私はとても驚きました。むしろ、普通に学校に行っていた子達が、大学に入ってから挫折するというのが現状ではよく見られます。不登校と社会復帰はあまり関係ないように感じています。

私は、中学校を卒業後、高校に入り、寮生活をしながら3年間通いました。高校では、それまでの環境とガラッと変わってしまいました。一番大きかったのは、親から離れ、時間を持てたことだったように思います。それまで、親のために生きていた私が、自分のために生きようと思えるようになりました。3年間の日々は、もちろん葛藤の連続でした。でもそのたびに、仲間や教師集団に全て受け入れてもらい、少しずつ自分自身を肯定できるようになり、他人の弱さや痛みも受け入れられるようになりました。

現在、私は大学2年生です。初めてやまびこの郷に足を踏み入れたあの時から、もう7年も経ちました。好きな大学に通わせてもらい、やりたい活動に参加し、行きたい国にカバン1つで行き、自分の生活費も自分で稼ぎ、本当に中学の頃には考えられなかったほど、のびのびと生きています。

でも、私は成長したとは思いません。私は今も、当時の傷を背負いながら生きているからです。それを感じる時は、悩んだ時です。いつもふり返り、中学時代の私から答えを探します。また、私は今、教員の免許取得のため授業を受けていますが、いじめ、不登校、非行、虐待などの問題について取り扱うたび、当時の私の心情と重なり、フラッシュバックを起こしてしまいます。そのことはとても辛く、もう一度傷をえぐり返すような思いがします。周りの方には、貴重な体験であると言われるのですが、私にとっては消してしまいたくなるほど辛くなる過去です。でも、この痛みは一生消えることはないのだと思います。

私は、この弱さを抱える自分を自信につなげ、自己肯定することはとても難しいことだと感じています。教職の授業でも、自分の過去にとらわれすぎて、問題の本質や別の観点を見落としているのではないだろうか、このまま教職をとっていたら、自分はずぶれてしまうのではないだろうかと感じています。でも、周りの人に「あなたの感性は鋭い」と認めてもらい、皆に支えられながら頑張っています。

私は今も一人では立てず、常に誰かに支えられて生きているような弱い人間です。でもそれでいいのだと開き直ったりもしています。中学の頃と同じように、傷つきやすく、悩みも多く、不器用で容量も少なく、強がりばかりで社会との葛藤を繰り返しています。こんな自分に自信があるとは、そう簡単に言えるようになれません。もしあの頃より得たものがあるとするなら、自分の感情を言葉にする力を持てたということです。私は、自分の原点である中学生の自分に「よく生きてきたね」と声をかけてあげたいです。

やまびこの郷の皆様。

私に当時をふり返るチャンスを与えてくれたこと、心から感謝します。

社会、家庭、教育現場がより一層大きな問題を抱え、複雑化する中、子どもたちの支援も、本当に大変な時期であろうと思います。しかし、子どもたちは、今を必死に生き抜こうとしています。どうか、ゆっくりと寄り添い、受け止めてあげてほしいと思います。そして、子どもたちを下支えする保護者の方々や教員への支援ができれば、間接的にその子達の土壌づくりにもなっていくのではないのでしょうか。どうぞ、子どもたちの声を聴き取ってあげてください。

これからも、やまびこの郷のより一層の向上と発展を心から願っています。

長文、失礼しました。

矢野 史子

※他にも多数お便りをいただいたが、本人の了承を得られたもののみ掲載した。